

「おくのほそ道」の俳句を声に出して読んでみよう。
各地の風景と芭蕉の心情を味わう！

はてデオ収録句

序章

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

旅立

行く春や鳥啼き魚の目は泪

日光

あらたうと青葉若葉の日の光

剃り捨て黒髪山に衣更 曾良

暫時は滝に籠るや夏の初

那須

かさねとは八重撫子の名なるべし 曾良

黒羽

夏山に足駄を拝む 首途哉

雲巖寺

木啄も庵はやぶらず夏木立

殺生石

野を横に馬牽きむけよほととぎす

遊行柳

田一枚植ゑて立ち去る柳かな

白河

卯の花をかざしに関の晴着かな 曾良

須賀川

風流の初やおくの田植うた

世の人の見付ぬ花や軒の栗

信夫の里

早苗とる手もとや昔しのぶ摺り

飯塚の里

笈も太刀も五月にかざれ帟幟

笠島

笠島はいつこ五月のぬかり道

武隈

桜より松は二木を三月越し

宮城野

あやめ草足に結ばん草鞋の緒

松島

松島や鶴に身をかれほととぎす 曾良

平泉

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな 曾良

五月雨の降り残してや光堂

尿前の関 蚤虱馬の尿する枕もと

尾花沢 涼しさを我宿にしてねまる也

這ひ出よかひやが下のひきの声

まゆはきを俤にして紅粉の花

蚕飼する人は古代のすがた哉 曾良

立石寺 閑かさや岩にしみ入る蝉の声

最上川 五月雨をあつめて早し最上川

羽黒 有難や雪をかをらす南谷

涼しさやほの三か月の羽黒山

雲の峰幾つ崩れて月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

湯殿山銭ふむ道の涙かな 曾良

酒田 あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ

象潟 暑き日を海にいれたり最上川

象潟や雨に西施がねぶの花

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

象潟や料理何くふ神祭 曾良

蟹の家や戸板を敷きて夕涼 低耳

波こえぬ契ありてやみさこの巢 曾良

越後路

文月や六日も常の夜には似にず

荒海や佐渡によこたふ天あまの河がは

市振

一家に遊女もねたり萩はぎと月

那古の浦

わせの香かや分け入る右は有磯海ありそうみ

金沢

塚も動けわが泣く声は秋の風

秋涼し手毎ていついにむけや瓜茄子うりなすび

あかあかと日は難面つれなくもあきの風

小松

しをらしき名や小松吹く萩はぎすき

むざんやな甲かぶとの下したのきりぎりす

那谷

石山の石より白し秋の風

山中

山中やまなかや菊はたをらぬ湯にほひの匂

行き行きてたふれ伏すとも萩はぎの原

曾良

今日けふよりや書付消さん笠かさの露つゆ

全昌寺

終宵よもすがら秋風聞くやうらの山

庭掃はきて出いでばや寺に散る柳

天竜寺

物書きて扇引あふせさく余波なごり哉

敦賀

月清し遊行ぎやうぎやうのもてる砂の上

名月なつきや北国日和定なき

種の浜

寂しさや須磨にかちたる浜の秋

浪なみの間まや小貝にまじる萩はぎの塵ちり

大垣

蛤はまぐしのふたみにわかれ行く秋ぞ